

橋本博士十週忌

追憶会のこと

この冬一月三十日、東京の一ツ橋如水会館で、故橋本進吉博士の十年祭、並びに追憶会が催されました。橋本博士令室、御長男研一氏、御息女弘子嬢、その他親族の方々を始め、橋本博士の知友門下が多数出席されました。門下の方々は、この日のために、はるばる北海道、九州から出席されていたようで、今さらながら、故博士の学徳の深厚さを痛感させられました。祭るにはいますがごとくするといいますが、全く橋本博士の御前にあるような感じが会場に充満し、ことに門下の方々はやや窮屈な感じをさえされたようでした。これにはまず司会者がやや堅くなつてしまわれた感じが——亀井孝氏には甚だ失礼ですが——、それがいよ／＼故博士のいますが如き空気を切実にかもしだし、私なども追憶会の帰途やつとほつと一いきつき得た感じでした。その点全く例のない、真の意味の追悼・追憶の会であった、近年またとない意味深い会であったとしみじみ痛感いたしました。

私は橋本博士の御生前の御言行の一端を

想起するとに、密接に橋本博士の教えを受けられた知友門下の方々が、橋本博士の御言行を今のうちに記録しておいて頂きたいという希望を申し述べないではおられません。学問研究上の小さな示唆・暗示は無論のこと、世俗の御感想までも一々記録しておいて下されば、どれだけ後世の人々に有益な参考となることでしょうか。積尊の滅後に、いくたびかの結集の行われたことは聞いておりますが、いままではそれを、結集せざるを得なかったところの、抑止することのできない内面的な強い要求が、仏教徒の胸裏をついて出たのだということには気がつきませんでした。ところが橋本博士の御言行の結集の要求を私自身の胸裏に身をもって切実に感じるることによって、往古の仏教徒の切実な要求の一端もはじめて理解できるような気がしてなりません。門下の有力な方々が、単に御講義の記録だけでなく、研究上に与えられた短少の御言葉に至るまで、記録して下さればと存じます。このたびの追憶会に参列させて頂いて、その感を強くいたしました。発表されること少なかつた橋本博士に、せめて一部の「玉勝間」でもあればと私はひどく口惜し思

うのです。しかしさようなことはまた一面ひどく橋本博士の御意志に反することであつたことも、知らないわけではありません。追憶の席ではまず久松博士が長流・契沖などに関して教えを受けられたこと、また校本万葉集に対する橋本博士の御尽瘁のことなどを、金田一博士は、学生時代東大で机を並べて学ばれた学窓時代の想い出や橋本博士の生涯一つも変らなかつた御性格のあの特徴的な几帳面さなど、市河博士は言語学科の先輩としての橋本博士を、——また橋本博士がさる女学校に関係されたことを奉られたことを紹介されました。誠にい得て妙、——武田祐吉博士は古葉略類聚鈔の書誌学的研究や、万葉集英訳事業に関する想い出をもつて、敬慕の意を表わされ、西尾実氏は日本文学報国会のころの權威に満ちあふれた故博士の想い出、時枝博士は橋本博士の逝去される直前直後の事情、当時の空襲混乱の騒然たる本郷の想い出を生々しく語り、またはるばる九州から参列された石坂正蔵氏は橋本博士の第三回目の学生としての想い出や博士の文体などのこと、博士のおられる所は、所のいか

んを問わず学問的雰囲気の漂う感のあつたことを、静かに語られました。

橋本研一氏は御子息としての立場から、室鑿造氏は故博士の従兄弟に当られるが、少年時代からの珍らしい故博士の逸話を披露され、岩波書店の布川角左衛門氏は出版者側としての追憶を語られました。研一氏がかつて父君に英語の勉強を見て頂いた際のことを語られ、辞書をよく引いておいでと注意されたこと述べられたとき、参会者の門下の方々が思わず肩をすくめられた。かつて東大における国語学の演習の際の記憶が生々しくこれらの人々を打ったでしょう。私としては、論語にいわゆる陳氏が伯魚の言を聞き、一を問うて三を得たる喜びを禁じ得ないものがありました。御子息が国学院に入学されたことをいそぐと喜ばれたこと、また同氏の入隊に際して営門まで見送られ、それが永久の訣別であったということなど、人々に強い感銘を与えましたが、これらの話の背後に、私は君子が良き意味で子を遠ざけられた一事を推測的にうかがうことができ、別な意味でその床しさに深い感銘を受けました。同氏はひどく御からだつきが故博士に似ておられるの

ですが、また一語句一語句のしみ通るような話しのおそれ方、一片の浮薄な影もなく、鋼鉄の針金を延べたような御口調が故博士を髣髴とさせるものがあつて、この会が追憶会というよりも、博士御生前の会のような錯覚をさえ、ひよつと与えるような気がいたしました。

橋本博士が名利を追わず、ひたすら研究に打ちこまれたこと、あわてず、さわがず悠々と落ちつきはらって探求の道を一途に進まれたことは、万人の敬慕おくあたわざる点であります。その御性格は全く天賦のもののように、幼少年時代から、すでに完成されていたようです。橋本少年が恐いほど徹底した少年であつたということを、私は近親の室氏の言葉から推察いたしました。室氏は事実をありのままに追憶されただけで、故博士を言葉の上でとくに賞賛しようとしたものではありませんが、その話のうらに、言外の事実の多くを聞きとって、ひどく打たれたのでした。おしつけられるような空気の中で、ただひとり算五百里氏の追憶談だけは朗らかなもので、一脈のユーモラスな感じを導入して下さいました。ただある機会に、そんな雑学は『研究に傾

しない。学者は学問探求に没頭すべきで、つまらないことにかかわる余暇は自分ない』また『若いものが人事移動などに関心をもつてはいけない』とはきだすように言われたということに対して、一大痛棒を受けたような衝撃を私は受けました。出版屋の小僧番頭のような仕事を引受けたり、受験屋の手伝いのようなことで時間を空費している私どもの正に冷汗をあびる点であると存じました。専門国語学者でもない岩波の布川氏に、実にたんねんに国語学上の興味ある諸問題や故博士の現在懐いておられる抱負を話され、布川氏をして戸まどいさせられたという一事など、橋本博士の面目の一端が躍如として感じとられました。それはだれかれなしに、自分の専門の話を無理に聞かせるというあのいまわしい悪癖というのではなく、却ってだれかれなしに、正直につつま秘さずに学問上の見解を語られたという美しい橋本博士の御性格が、私にはひどく感動的に受けとれました。それから大野晋氏は、ひどく謹んで閉会のあいさつをされました。強い感銘を受けて、帰途の電車の中で、我れに帰ってほつと一息をついた感じがいたしました。(中田祝夫)